2008 年　第 5 回　国際スポーツ社会学会世界会議　京都大会

5th ISSA World Congress, Kyoto 2008

報告

実行委員長　杉本厚夫（関西大学）

2008 年 7 月 26 日（土）～29 日（火）、第 5 回国際スポーツ社会学会世界会議京都大会が、京都大学で開催されました。

テーマは、

社会とスポーツの岐路（Sport and Society at the Crossroads）

グローバリゼーションする社会にあって、スポーツの果たす役割は大きいと言えます。ビジネスとして、地域社会の再生として、メディア･コンテンツとして、スポーツは社会のさまざまな局面で影響力を持つ文化となりました。このようなスポーツが、豊かな社会を創造することに貢献するためにはどのようにあったらいいのか、世界レベルで議論する目的で、このテーマを設定しました。

この大会は、国際スポーツ社会学会；ISSA（International Sociology of Sport Association）と日本スポーツ社会学会；JSSS(Japan Society of Sport Sociology)との共催で行われました。

2004 年に現 ISSA 会長のスティーブ・ジャクソン氏に京都でお会いし、この大会の日本での開催の可能性について話し合いました。その結果、世界的な情勢を勘案し、2008 年の北京オリンピックの年に日本で開催することが決定されました。それから、すぐに日本スポーツ社会学会に準備委員会を立ち上げ、開催日時と開催場所を決定し準備を始めました。2007 年の ISSA コペンハーゲン大会では京都大会のアピールをし、帰国後、すぐに実行委員会を立ち上げ、開催に向けての具体的な作業に入りました。

実行委員会の方々の献身的なご尽力によって、キーノートレクチャー２題、公開シンポジウム１題、会員シンポジウム２題、ワークショップ２題と充実したプログラムを企画していただきました。さらに、予算の面でも、京都大学、立命館大学、関西大学、京都教育大学にご支援をいただき、15 社にもおよぶ企業に協賛をお引き受けいただきました。また、文部科学省、日本体育協会、京都府、京都市の後援もいただきました。

おかげさまで、世界 32 カ国から約 280 名の参加者があり、発表も口頭発表 167 題、ポスター発表 23 題と、これまでない盛会となりました。とりわけ、多くの日本の若手研究者に積極的に発表していただき、国際学会の貴重な経験になると同時に、今後の日本スポーツ社会学会の発展に寄与していただけるものと、大いに期待しております。

海外から参加された多くの方々が、日本のホスピタリティにとても満足されていました。それもこれもこの大会に関わってくださった多くの方々の温かいご支援の賜物と、心より感謝いたしております。

大変遅くなりましたが、大会の概要について皆さんにご報告させていただきます。

スケジュール

	26-Jul	27-Jul	28-Jul	29-Jul
8:00 8:30			Session 3 文学部講義室 7 室	
9:00		Opening ceremony		
		Keynote speech 1 文学部第 3 講義室		Keynote speech 2 文学部第 3 講義室
10:00				
10:30		Coffee break	Coffee break	Coffee break
		Session 1 文学部講義室 7 室	Session 4 文学部講義室 7 室	Session 6 文学部講義室 7 室
12:00				
12:30	Registration 国際ホール前			
		Lunch 講義室 1,2	Lunch 講義室 1,2	Closing Ceremony
13:30				optional excursion
14:00		Symposium 1 時計台記念ホール	Session 5 文学部講義室 7 室	
	Pre-Congress Workshop 国際ホール Ⅰ・Ⅱ			
15:30				
16:00		Coffee break	Coffee break	
		Session 2 文学部講義室 7 室	Symposium 2 芝蘭会館 稲盛ホール 山内ホール	
17:00				
18:00	Coffee break			
	Welcome Reception 国際ホール Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	Poster session 文学部ゼミ室	Workshop 芝蘭会館	
19:00		ISSA Assembly	Congress Dinner 芝蘭会館本館	
20:00		optional excursion		
21:00				

27th ,29th July: Keynote Address

Kari Fasting (Norwegian School of Sport Sciences)
Violence against women in sport – recognizing an invisible crossroad
Chair: **Steve Jackson** (University of Otago)

Kimio Ito (University of Kyoto, President of JSSS)
We, Japanese, gotta have WA? -“Collectivism” in Japanese sport culture-
Chair: **Lee Thompson** (Waseda University)

スポーツにおける女性への暴力

Violence against women in sport – recognizing an invisible crossroad

Kari Fasting (Norwegian School of Sport Sciences)
訳：飯田貴子（帝塚山学院大学）

女性への暴力は、あらゆる地域、国、社会、文化において生じており、所得、階級、人種、民族にかかわりなく女性を蝕んでいる。国連によると、女性が被っている様々な形態の暴力には、職場や学校における性的虐待、セクシュアル・ハラスメント、性的脅迫も含まれており、今日では、スポーツの場をそのリストに加えることができる。

国際的には、性に基づく暴力に関する最も包括的な政治声明には、国連「女性に対する暴力の撤廃に関する宣言」（1993）および国連「第４回世界女性会議／北京会議の行動綱領」（1995）がある。そこでは、性に基づく暴力は、女性の人権への侵害であり差別であると定義していて、こうした人権侵害や差別が、女性の十分な社会参加を（ここにスポーツの世界を含むことができる）、および人間としての可能性の達成を阻んでいる。

セクシュアル・ハラスメントとは？

セクシュアル・ハラスメントは、ジェンダー・ハラスメント、望まない性的な注意、性行為の強制の３つに分類されることが多い。ジェンダー・ハラスメントは、言葉や態度、行動で示され、性的な協調をねらうものだけでなく、女性に対する侮辱、敵意、品格を貶める言動も含まれる。男性支配のスポーツでは、性的なハラスメントが最も広く生じている。望まない性的な注意も広い範囲においてみられる。これらは攻撃的で相手の意に反したものであるが、見返りを要求するものではない。一方、性行為の強制は、仕事上の配慮に対する見返りとして性的関係を強要する。

ある研究者は、性差別とセクシュアル・ハラスメントと性虐待を、連続線上にとらえている。ハラスメントと虐待の違いは、コーチと若い選手の関係を理解しようとするときに役立つ。性的虐待をねらってのグルーミングは、子どもの信頼を少しずつ得ていき、そうして、二人の間にあるバリ

アを計画的に取り除いていくことである。若い選手は、全面的に罠にはまってしまうのである。何故なら、チームから外されたり、特典を与えられないといった脅しによって、服従することが余儀なくされているからである。

セクシュアル・ハラスメントには、厳しくて不快な環境も含まれる。そのような環境は、直接に被害を受けた人物だけでなく、周囲の選手にも影響を及ぼし、選手を混乱させ、競技能力を阻害するからである。彼女／彼らも、セクシュアル・ハラスメントの犠牲者である。

私たちはスポーツにおけるセクシュアル・ハラスメントに関し、何を知っているか？

近年、スポーツにけるセクシュアル・ハラスメントに関する質的・量的研究が進み、リスクファクター、理論的モデル、選手の経験に基づく陳述が報告されてきた。しかし、その頻度、理由、特徴、影響については、ごくわずかしか解っていないし、さらに政策や行動計画の効果については、もっと把握できていない。そのような中で、スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメントの特性をあげると、男性から女性に対して行われることが多い、加害者はコーチや同僚である、その頻度は 19%～57%と幅が広く、パフォーマンスレベルで見るとエリート選手に多い、学校や大学など教育の場と比較するとスポーツの方が少ない、スポーツ体育専攻学生は一般学生よりもセクシュアル・ハラスメントに対して許容的である等がある。

また、その影響については、スポーツからの撤退、コーチおよび仲間との人間関係の損傷、他の男性やコーチに対する態度の変容、競技への集中力低下、自尊心やボディイメージに対する否定的影響、成績の低下、参加意欲の低下などがあげられる。

さらに、スポーツが持つリスクファクターをコーチ、選手、スポーツの側面から抽出する試みもされており、そこにはスポーツが専制的権威システムやヒエラルキー的システムを擁していると述べられている。

スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメントをどのように説明できるか？

ジェンダー理論から言及すれば、自然／生物学的よりも、組織的および社会文化的なモデルに関心が集まる。また、心理的説明を試みている研究者もいる。つまり、セクシュアル・ハラスメントは、マスキュリニティを確認するために男性にのしかかる心理的抑圧が明示されたものであるという。そのため、セクシュアル・ハラスメントを防ぐには、男性支配との闘争および家父長的権力への抵抗が重要となる。

さらに、ブルデュー理論が、何故セクシュアル・ハラスメントが起きるのかだけでなく、何故減少するのが困難なのかを理解するのに役立つ。ハビトゥスは、身体、制度、階級内に統合された持続的性向のシステムであり、男性支配はハビトゥスの一部である。男性支配は保持され、暴力をとおして再生産される。セクシュアル・ハラスメントは、男女間に現れる権力関係の結果である。ブルデューは、女性に対する男性権力の再生産の場として、学校、教会、国家をあげているが、私たちはそこにスポーツを加える。ブルデュー理論から述べると、スポーツ制度の再構築が男性支配の持続的再生産を止めさせるために必要であり、それには、ジェンダー秩序再生産の変更が必要であろう。

スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメントおよび性虐待の防止と方針

この 15 年間、アメリカ、カナダ、イギリスをはじめとする国々は、スポーツにおけるセクシュアル・ハラスメントや虐待を防ぐために、方針や実施基準を開発してきたが、世界的にみれば、多くの国で問題にされてはいない。そのような中で、WSI は性的搾取のリスクを最小化するための勧

告をだしているし、2007 年、UNICEF および IOC もこの分野においてプロジェクトを立ち上げた。演者は、WSI の会長であり、プロジェクト双方の専門委員会のメンバーでもある。

IOC の声明文は、全てのスポーツ組織に対して、セクシュアル・ハラスメントと虐待を防止するための方針や手順の策定、実行の監視および評価、教育プログラムの開発、公平で尊敬され倫理的なリーダーの育成、両親や保護者との強いパートナーシップ、科学的調査研究を勧告している。問題は、IOC が効果的に NOC や ISF に関わっていくか、そして、これらの組織がこの勧告に従う気持ちがあるかどうかである。IOC 自身は、この勧告にそって活動していくための計画をもっている。すなわち、全てのスポーツ組織が防止に向けた方針を持ち、セクシュアル・ハラスメントが管理者、コーチ、選手の教育テーマになるようにすることである。そうして、スポーツおよび社会における男性支配に変化が並行して起これば、そのとき、スポーツは女性にとって受け入れやすい環境となるであろう。

日本のスポーツ文化と「集団主義」

We, Japanese, gotta have WA?

伊藤公雄（京都大学）

「日本人の特異な国民性は、彼らが自らの国民性に強い関心をもっていることだ」とは、しばしば指摘されるところである。なかでも、日本人の特徴という点で、戦後日本社会においてほぼ例外なく共有されているイメージに「集団主義」がある。「個人より集団を優先する傾向」としての「集団主義」という視点から、（日本人は）「個人というものが確立していない」「和を尊び、つねに集団として行動する」とする見方は、海外においても、強固なイメージとして定着している。

本報告は、こうしたイメージとしての「日本的集団主義」の問題を、スポーツを対象にして考察してみようという試みである。

スポーツを通じた「日本的集団主義」論として、よく知られた著書に、ロバート・ホワイティングによる『和をもって日本となす You Gotta Have Wa』（初出は１９８９年）がある。ホワイティングは、こうはっきりと書いている。「集団的調和、すなわち和の概念は、アメリカ野球と日本のそれとをもっとも劇的に区分するものだ。和は、すべての日本人の生活とスポーツを貫いて作用している。『他人にかまわず思い切りやれ』とか『自分の思うことをやれ』は、現代のアメリカ社会のモットーだが、日本人の信条は、よく知られた次のようなことわざに示されている。『出る釘は叩かれる』。これは、実際、国民的なスローガンなのだ」（Whiting,1989:70 伊藤訳、翻訳書ホワイティング＝玉木訳、1990：115 頁相当箇所）。

しかし、次のような指摘もある。「運動競技についていうと、日本の伝統スポーツは、相撲、柔道、剣道など、一対一のものがほとんどだが、欧米のものは、野球、サッカー、ラグビー、クリケット、バスケットボール、フットボール、みんな集団競技ばかりではないか。最近、日本に輸入されて人気のあるのは、ゴルフ、テニスなど個人ゲームが中心である」（杉本良夫、ロス・マオア『日本人は「日本的」か』、東洋経済新報社、1982：189）。実際、戦前期に書かれた比較スポーツ文化論には、「剣道、柔道にしても、二人の対抗勝負であるが、西洋の競技は多人数合同して、協同的動作を要する。・・・一体我が国の生活は従来は個人的であり、階級的であったから、勝負事までもそうであった」（下田次郎『運動競技と国民性』、株式会社右文堂、1928：216–7）といった記述もみられる。

日本における遊戯の歴史をみても同様のことがいえる。日本のサッカーについて論じたガーンスによれば、すでに唐の時代ゴールポストに向かって集団対抗で行なわれていたフットボールが、日本に輸入されると、蹴鞠のような個人のパフォーマンスを重視した「勝負のない娯楽として取り入れられた」という（ガーンス,B.「日本蹴球文化の概要」園田英弘編『逆欠如の日本文化―日本にあるものは世界にあるか』思文閣出版、2005：166）近世の日本の子どもの遊戯の歴史を調べても、集団対抗で行なわれるものは、雪合戦くらいで、他は個人対抗ないし個人のパフォーマンス中心のものがほとんどである。近代日本で最も人気のある集団スポーツである野球においても、基本的に、ピッチャーとバッターの一対一の「対決」に重点がおかれ、各プレイヤー全体の動きについてはほとんど関心を呼ばないようにさえ見える。

現代では、聖徳太子の名前とともに、古くからの「伝統」として認識されているいわゆる「和の精神」が、１９３０年代日本の「日本精神論」ブームのなかで再創造された「創られた伝統」であるという認識（Ito, K.,“The Invention of Wa and the Transformation of Prince Shtoku in Modern Japan” in S. Vlastos (ed.) Mirror of Modernity, University of California Press,1998.）は、最近の近代日本文化史研究においても共有されつつある（鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』平凡社、2005 など）。

本報告においては、こうした近代日本における集団スポーツの構図を歴史的・文化的文脈に沿いつつ探るとともに、近年の社会心理学の研究の成果（高野陽太郎『「集団主義」という錯覚』新曜社、2008、山岸俊男『日本の「安心」はなぜ消えたのか』、集英社、2008 など）を参照し、日本のスポーツにおける「集団主義」の問題についてさらに考察を加えた。高野や山岸によれば、どちらかといえば「個人主義」的傾向の強い（山岸、高野ともに実験によって確認している）日本人の多くは、「今、自分はどう振る舞った方が得をするか」と考えて行動する。しかし、いつでも的確な判断がくだせるわけではない。状況がわからないときに、こうした人々が選択するのは、「とりあえず選択される『無難なやり方』」（山岸、2008：58）、つまり、「初期値としてあらかじめ設定されている」方法＝デフォルト戦略（山岸、同：58～59）をとるということになる。その場合、日本社会では（文化構造に支えられつつ）一般に他者は「集団主義的」に動くと考えられるわけだから、個人の利益を確保するには「集団」に合わせる方が、不利益が少ない可能性が高いというわけである。

確かに、日本における社会生活やスポーツ・シーンに「集団主義」的要素がまったくないとは思われない。むしろ、外部から観察したとき、日本の集団は、極めて「集団主義」にみえることも事実である。その意味で、問題とされるべきは、集団主義か個人主義かという単純な二分法ではなく、日本型集団主義と呼ばれてきたものの中味の方なのだろう。本報告では、高野や山岸の研究に依拠しつつ、集団主義を、（個々のメンバーの役割分担と調整による）「協調型」と（他のメンバーとの同調について配慮する傾向が強い）「同調型」とに分類し、近代日本のスポーツにおける集団主義を、「同調型」のそれとして考察することの異議について提案した。

しかし、現代の日本のスポーツ・シーンにおいて「集団性」の中味は確実に変化しつつあるように見える。特に、１９９０年代のＪリーグ誕生以後、スポーツ・シーンにおける「集団性」は変容の兆をはっきりとみせつつある。こうしたスポーツ・シーンにおける変化を、現代日本社会における社会関係の変化と重ねることで、スポーツ社会学からの日本社会論へのアプローチの可能性について、最後に簡単にふれることで報告を閉じた。

27th July: Olympic Symposium

The Olympic Games: Tradition, Globalization, Media, Power

Chair: **Atsuo Sugimoto**

Wlliam W. Kelly: *The Olympics in East Asia: The Crucible of Localism, Nationalism, Regionalism, and Globalism*

Satoshi Shimizu: *The 1964 Tokyo Olympics and East Asian Problems: Torch Relay in Okinawa and Tokyo*

Xin Xu: *Between Dream and Reality: Competing Narratives of the Beijing Olympics*

Gwang Ok: *A Catalyst for Korean Modern Transformation and Globalization: The Significance of the 88' Seoul Olympics*

オリンピック大会
ー伝統、グローバリゼーション、メディア、権力ー
The Olympic Games: Tradition, Globalization, Media, Power

コーディネーター：清水　諭（筑波大学）

大会２日目の午後に時計台記念ホールで行われたオリンピックをめぐるシンポジウムは、東アジアにおけるオリンピック運動に関する総括的な発表のあと、1964 年東京、1988 年ソウル、そして 2008 年北京の各オリンピック大会をめぐる諸問題とその歴史的コンテクストが映し出された。特に、グローバルな世界の中での国家と国民とをめぐる諸問題が浮き彫りにされたように思われる。

東アジアにおけるオリンピック
：ローカリズム、ナショナリズム、リージョナリズム、そしてグローバリズムの坩堝
ウィリアム, W. ケリー（イェール大学）

現在、グローバルなスポーツ界の頂点にあるオリンピック大会は、１世紀以上にわたって、４年に１回のリズムで世界のスポーツ・カレンダーに印づけられ、数週間の間、地球上の人間の注目を一つの開催都市と国家に集める。偉大なオリンピック研究者であるジョン・マッカルーンによれば、それはスポーツの競技、祝祭、儀礼、そして壮大なスペクタクル――すなわち、すべては一つの熱気溢れる、色とりどりの、そしてしばしば論議を巻き起こす豪華なショウとして要約される。2008 年北京大会は、オリンピックの歴史において、アジアで開催される５回目の大会だった。（正確には古典的な）西洋起源のスポーツ・メガイベントのアジアにおける開催地として、これらのオリンピック大会はテーマ的に大きな相違をもっている。大会に向けての準備期間において、何回も何回も、私たちは、これまで開催されてきたすべての大会と異なるものだと聞かされてきた。

2008 年北京大会は、文化においてラディカルな相違――アジア的なるものとしてのラディカル

な側面があった。例えば、何人かの研究者は、ギリシアに生起する西洋的な文明化の中国に対する洗礼、つまり 2008 年におけるアジアの文明化の揺籃であるとした。最終的に、オリンピック大会は、偏狭なヨーロッパ中心主義的哲学がグローバルな哲学的基盤により確実に転位したとするのである。一方で、政治に関する相違があった。オリンピック聖火リレーの旅がはっきりと示したように、中国国家によるプロパガンダのどん欲な野心は、その決定と戦略的な意図に対し、前例のないスケールで世界の多くの人々から反対の抵抗に出会った。

しかしながら、第 29 回オリンピック大会は、これまで 28 回の大会に比べて、まさに分岐点となるのだろうか？北京オリンピックは、ラディカルな出発、つまりオリンピック運動の歴史的軌跡における変容の瞬間だったのだろうか？抵抗のレベルなど弊害の程度やアジアにおけるスポーツの将来の可能性は、オリンピックの構造や意味の再構成につながるのだろうか？

今回の発表において、私はオリンピック大会がこうした新たな出発につながっていないことを述べ、そして以下のような４つの要因によって、オリンピックとその大会を正常化し、慣例化することに作用したと論じた。

1)オリンピック運動とその構成要素への参加の仕方は、１世紀以上にわたる改善手続きによって、慣例化されてきていること。

2)私がオリンピック時間と称する影響が強くあること。

3)2008 年に新たな主張と変容についての展望が間違った形で示されたが、オリンピック運動に対する東アジアの比較的長く、よく認識された歴史があること。

4)最後に、オリンピック運動の成立において、そして 2008 年北京における度を超したものであったとしても逃げることのない、多様で交錯した矛盾が存在すること。

北京オリンピック大会が正常に終わることを望んでいた点において、私たちはオリンピック大会自体が通常のスポーツイベントと異なっていること、そしてオリンピック運動が他のスポーツ組織と異なっている点を思い起こさなければならない。奇妙なのは、誰もが、そしてどれもが、オリンピックの力の及ぶ範囲から逃れる軌道に存在することは難しいという、とても異常な点である。

（訳：清水　諭）

1964 年東京オリンピックと東アジアの諸問題
：沖縄と東京における聖火リレー

清水　諭（筑波大学）

1964 年、日本の首都東京でオリンピックが開催された。1959 年ミュンヘンにおける IOC 総会で開催が決定されて以来、9873 億 6300 万円（組織委員会経費、競技施設の建設整備費、高速道路、公園、下水道、ワシントンハイツ（米軍宿舎）移転、東海道新幹線、幹線道路、地下鉄、東京国際空港（羽田）、ホテル、旅館、NHK 放送センターなど通信施設の整備など関連事業費の総額）を投じて、「平和と友好」「首都東京と日本の経済成長」が世界に向けてアピールされた。

都市計画のヴィジョンを深く議論したわけではなかったが、会場となる明治神宮外苑エリア、代々木エリア、駒沢エリアの開発とそれらを結ぶ道路として青山通り（246 号線）ができたことにより「東京のストラクチュアが様変わりした」（黒川紀章, 2004）ことは確かだった。そして、世界からアスリートが集い、「スポーツマンシップが視覚に強く焼きつけられ」（東竜太郎, 1965）「『一億総夢心地』ともいうべき 15 日間」（川本信正, 1965）が創出された。まさに東京オリンピックは、国民のため、文化的発展のため、そして富の増大のための政治的なプロジェクトとして、ナショナリズムが作動したと考えられる。（Lincoln Allison, 2002; 町村敬志, 2007）

中でも聖火リレー（12 ヵ国、51 日、7484km、100,743 人）は、「日本」を、そして「日

本国民であること」を想起させるイベントだったと思われる。8月 21 日オリンピアで採火された聖火は、大陸を横断し、中国や朝鮮半島を通過せず、香港、台北を周り、9月7日に米国施政権下にあった沖縄、那覇に到着し、5日間にわたり本島を一周（247.1km）した。

米軍は、1945 年の沖縄上陸直後から日本国旗と国歌の斉唱演奏を禁止し、1949 年の集成刑法では米国国旗以外の国旗掲揚まで禁止していた。法的祝祭日に限り公共的な建物にも「日の丸」掲揚が許可されるようになったのは、1961 年のことだった。1964 年当時、沖縄教職員会を中心とした「日の丸」掲揚運動は、「祖国復帰運動」と重なり、自由に振ることのできなかった「国旗」への愛着もあって、式典や沿道は「日の丸」であふれかえった。まさにナショナル・シンボルを用いたパフォーマティヴな儀礼的行為を通じて、「日本国民であること」を意識させる瞬間が東京オリンピックに関連して生じたのである。

しかしながら、1980 年2月に第 42 回国民体育大会「海邦国体」の開催（1987 年 10 月）が決定されると、天皇の開会式出席、「国旗掲揚」、「国歌斉唱」が行われる大会に向けて、読谷村議会などでは「日の丸」「君が代」の押しつけに対する反対の議論が巻き起こった。そして、10 月 26 日ソフトボール会場（読谷村）で「日の丸」が引き降ろされたのだった。

私たちは、より具体的な地域における人々の体験と記憶を捉えることから、オリンピックを始めとするスポーツイベントとナショナリズム、そしてナショナリティの構築について議論することを忘れてはならないだろう。

韓国の近代への変容とグローバリゼーションにおける一つの触媒
：88’ソウル・オリンピックの意味

オク・グァング（国立チュンブック大学）

韓国の近代スポーツにおけるハイライトは、88’ソウル・オリンピックである。それはグローバル・スポーツの運動、社会的-文化的な変容、そして政治的な意図の産物と捉えることができる。韓国は、その歴史を通じて、スポーツが社会的-政治的な側面と非常に関係していることを示してきた。韓国の近代スポーツは、本来的に経済的、そして政治的な側面を優先した結果だ。スポーツと社会の近代化過程において、政府はその最も重要な役割を果たした一つの大きな機関だった。88’ソウル・オリンピックは、韓国の近代への変容と特に経済的、政治的な発展とを結びつけた大きな成功の物語として語られた。

ソウル・オリンピックは、明らかにナショナル・アイデンティティを向上させ、韓国の近代社会を発展させることに影響を及ぼしたメガ・イベントを開催した国家として国際的な役割モデルになっている。競技、学問、そして文化的祝祭という近代オリンピック大会の３大要素は、大会期間中、成功裏に遂行された。大会には IOC に加盟している 159 ヵ国、8,391 選手（女子 2,194 名、男子 6,197 名）が参加し、237 種目が行われた。野球、テコンドー、そして女子柔道は公開競技だった。近代オリンピックの歴史を通してみても、40,000 人の選手、役員、審判、そして公式には 167 ヵ国からの報道機関（11,331 のメディア、うち 4,978 の活字メディアと 6,353 の放送メディア）、非公式には 240,000 人が競技、学術、そして文化のイベントに訪れた。それはまた、世界を覆う権力関係としての冷戦構造における最後の歴史的イベントとして注目された。

本研究は、大会前、期間中、そして大会後におけるメディアと学術的な資料に基づいて、ソウル・オリンピックの政治的、経済的、社会的、そして文化的な意義を評価した。ソウル・オリンピックは、SLOOC（ソウル・オリンピック組織委員会）と IOC との骨身を削った関係を通じて、世界の平和と調和を生み出した韓国とオリンピック運動の双方にとって最も成功した勝利の一つとして確かに認識されることができた。ソウル・オリンピックは、共産主義国や条約を締結していない国々

と韓国との外交関係を促進することに寄与した。加えてそれは、二つの朝鮮の間の平和にも貢献してきた。スポーツを通じた両朝鮮と世界とのグローバルな関係の認識は、ソウル・オリンピックによって現実に示されてきたのである。スポーツは、国家外交の向上をもたらす強力な政治的ツールだった。そしてまた、ソウル・オリンピックは、グローバリゼーションのかたちを構築するための成功した業績だ。2008 年北京のオリンピックもソウル大会による経験のように、東アジア地域と世界における政治的関係の特質が変化する先駆けとなるだろう。　　（訳：清水　諭）

夢と現実の間で：北京オリンピックに関する物語の競い合い

シュウ・シン（コーネル大学）

北京オリンピックは、一方で中国国家と一般の国民との間の、そしてもう一方で中国と世界との間の、複雑な関係を際立たせた歴史的なイベントである。それは、国内的には中国で開催される初のオリンピック大会に中国国家の関心と国民の熱い期待がはっきりと集約され、国外においては上昇する中国が、北京における 2008 年大会というコンテクストにおいて、特に西洋の疑り深い観衆に対峙することを示している。

スローガン「一つの世界、一つの夢（One World One Dream）」は、オリンピック大会を中国が初めて主催することに誇りをもつ国民によって喜んで受け入れられたが、中国がそのようなことを行うことに様々な理由で異を唱える、多くの国際社会（特に西洋）から疑問を呈された。グローバルなメディアのスポットライトにおいて、西洋におけるオリンピックの聖火リレーの行程で反ー中国の抗議者と中国の若者たちによる愛国的な示威行為との衝突が最も大きく映し出されたような北京オリンピックに関する物語の競い合いは、結局、異なる複数の夢の間の、そして世界の中国理解と中国人の世界理解との間の、大きなギャップを強調したのだ。オリンピック大会の矛盾だが、北京大会が「政治化された」という点において、「一つの夢」のもとで世界が統合される代わりに、単純な「黒と白」の光の中で世界が分極化したように捉えられた。グローバルなアイデンティティ「私たちは世界（We are the World）」は「私たち対彼ら」の現実に簡単に道を譲ってしまったように見えた。

本報告では政治的な利用に向かう国民の土台としてのオリンピック大会の悪用に対して、クリティカルな視線を向け、聖火リレーの行程における北京オリンピックに関する物語の競い合いについて取り上げた。

北京オリンピックの聖火リレーにおいて示されたのは、何人かの中国国民が国家による後援や承認なしに自発的にナショナリズムの横断幕のもとで、「反ー中国の諸力」同盟と議論し衝突した一方で、中国国外の非政府活動家たちがよく練られた「オリンピック混乱キャンペーン」を通して彼ら彼女らの目的を達成するためにオリンピックの土台を奪おうとしたことである。この衝突に関する矛盾には二つの側面がある。一方で、表面上は体制を問題視したにもかかわらず、開催国をターゲットにして攻撃することによってオリンピックの土台を搾取しようとしたことは、結果的に一般国民を激怒させ、変化を期待する集団の支持を得られなかったこと。もう一方で、オリンピック大会を政治化するために結果的にアイデンティティの狭い定義を強化するだけで、それ故、オリンピック精神に埋め込まれた「普遍的価値」を促進させることよりも、「私たち対彼ら彼女ら」のステレオタイプを強固にしたことである。

この矛盾は、オリンピック運動とグローバリゼーションに埋め込まれた内在的な緊張を映し出している。しかしながら、これらのグローバル化のプロセスは、グローバルな状況における相違なるナショナル・アイデンティティと熱い期待の表現（集約というよりも）であることを示している。（訳：清水　諭）

28th July: Symposiums

a. Sport in Asia: Tradition and Transformation, Modern and Postmodern at the Crossroads

Coordinator: **Soon-Hee Whang** Co-Chairs**: John Horne**

Steve J. Jackson: *Globalization and Sport at the crossroad: Current and Future; Research Dimensions Within and Beyond Asia*

G. Chuchchai: *The transformation of Muay-Thai:From Tradition to Modernity*

Yee-Joong Yoon: *Actual Status of Sport Tourism in Korea and its development methods*

Wolfram Manzenreiter: *The challenge of hegemonic masculinity in Japanese sport subcultures*

Commentator: **Hyun-Chin Lim**

b. Sport and the Public Sphere

Coordinators: **Koichi Kiku, Yasuo Yamaguchi**

Alan Bairner: *Sport and the Public Sphere*

Paul De Knop, Veerle De Bosscher, Maarten van Bottenburg and Sylvie Leblicq: *Sports Policy in the Public Sphere: Why the Netherlands are Successful in Elite Sports and Belgium is not ?*

Kiyoshi Abe: *Sporting Body and the Performing Public Sphere*

スポーツと公共圏
Sport and Public Sphere

コーディネーター：菊幸一（筑波大学）、山口泰雄（神戸大学）

・テーマ設定の趣旨

「公共圏」それ自体の概念はハーバーマスに由来するが、彼のこの概念は、市民的なコミュニケーションによる公共空間（市民的公共圏）の歴史的形成過程とその規範的概念の重要性を指摘したものであった。そこでは、近代政治体制とは別の、批判的公共圏として機能する近代的コミュニケーションとして、この公共圏を擁護しようとする立場があり、その可能性を追求することが強調された。それは、彼の「未完の近代」というテーゼとともに一般化されていると思われる。したがって、この批判的公共圏の機能からみれば、近代以降、顕著に現われた福祉国家体制は、その機能を

むしろ著しく減退させ、上からの公共性を市民が一方的に受容し、これに依存する「受容的公共圏」を形成しているとされ、その歴史的な構造転換が鋭く批判されたのであった。これまでスポーツは、とくに近代スポーツの誕生以降、既成の国家的ナショナリズム、リベラリズム、アマチュアリズム等々との関係から多くの問題が論じられてきたが、ハーバーマスが提起したこのような「公共圏」の概念からラディカルなレベルで論じられることはあまりなかった。ところが、一方でこの概念は1990 年前後の東西冷戦の終結とＩＴ化、グローバル化という新たな社会変動による影響から、その公共的コミュニケーション空間（公共圏）の可能性を再び問い直され始めている現状にある。

このような公共圏の変遷とスポーツとはどのように関連し、現代社会におけるスポーツはどのような公共圏として具体的に立ち現われているのであろうか。ここでは、スポーツと公共圏との関係について、

１）その担い手の階級や政治的性格の歴史社会的変遷から明らかにしながら（アラン・ベアナー氏、イギリス）、

２）現代社会におけるスポーツと公共圏の具体的な現象を各国のスポーツ政策から読み解き（ポール・デ・ノップ氏、ベルギー）、

３）その比較社会学的な理解から近未来におけるスポーツ「からの」公共圏形成の可能性と課題とは何か（阿部潔氏、日本）

等々、について議論することが期待された。

・A.ベアナー氏（Prof. Alan Bairner，ラフバラ大学・イギリス）による報告

ベアナー氏は、『スポーツと公共圏：北アイルランドの事例が教えてくれるもの』と題して、これまで自身が研究テーマの事例としてきた北アイルランドの複雑な歴史的政治状況とスポーツとの関係から、問題提起されたハーバーマスの「公共圏」概念を批判しつつ、現代スポーツの「公共圏」形成の可能性を論じようとした。まず、ハーバーマスのそれは、従来から批判されているように階級的にはブルジョアジー概念であるばかりでなく、ヨーロッパ的、男性的性格を有している。このエリート主義批判にハーバーマス自身が気づいていたとしても、その限界は現代社会におけるグローバル化されたなかでの複雑な断層（境界）によってそのコミュニケーションが弱体化していることからも明らかである。その限界を克服する担い手として、ベアナー氏はアントニオ・グラムシの「有機的知識人（organic intellectuals）」論に依拠しつつ、労働者階級における彼らの役割と機能に期待する。

そして、この事例を北アイルランドにおける政治とスポーツとの関係に求め、民族的にも宗教的にも国家分断を余儀なくされた彼地におけるスポーツ（とくにサッカー）界の有機的知識人として、スポーツ指導者やアスリートたちが果たした公共圏形成への重要な役割と課題について論じた。そこでの特徴は、彼らが単にスポーツ界の一員として対労働者階級や対ファンに有機的知識人という立場を保持しているからだけでなく、むしろそこから離れて既成の政治システムと積極的にかかわり合うことによって、これまで公共圏を形成してきた既成の政治家や（ハーバーマス的な意味での）「おしゃべり階級（the chattering class）」より大きな影響力を与えることが可能であるというところにある。ベアナー氏は、複雑な現実的断層（境界）を有する北アイルランドにおいて、現代スポーツのもたらす集合的な帰属感情が、とくにそれらを超えた「北アイルランドらしさ」を認識する公共圏形成にどのような可能性をもたらすのかを問おうとしていると言えよう。

・P. デ・ノップ氏（Prof. Paul De Knop，ブリュッセル自由大学・ベルギー）による報告

デ・ノップ氏は、『公共圏におけるスポーツ政策：なぜエリートスポーツにおいてオランダは成

功し、ベルギーは成功しなかったのか？』と題して発表した。ベルギーとオランダは、人口と経済力においてはほぼ同等でありながら、オランダが国際スポーツ界において、より輝かしい成功を収めているのはなぜか、と問う。先行研究では、オリンピックにおけるメダル獲得数を社会経済指標で説明したものが中心であった。が、同氏は、スポーツ政策とスポーツ予算に着目し、その効率性と効果に焦点を当てる。

まず、ベルギーとオランダにおけるスポーツ政策とスポーツ環境を比較する。特に、エリートスポーツの風土と文化特性を議論する。そして、国際競技の成功における最も強い予測因子として、エリートスポーツに投入された予算に着目する。その結果は、一般的に取り上げるような、スポーツ総予算に占める競技スポーツ予算ではなく、投入された競技予算の効率性と効果であることをさまざまな事例を援用し実証した。さらに、ベルギー国内におけるフランダース圏、フランス語圏、ドイツ語圏といった３つの政治的・文化的特殊性を取り上げ、スポーツ政策における効率性と効果の問題を解説した。

・阿部潔氏（Prof. Kiyoshi Abe，関西学院大学・日本）による報告

阿部氏は、『スポーツする身体と公共圏の形成』と題して、スポーツイベントとそこにおけるスポーツする身体がもたらす現代的な公共圏形成の可能性について論じた。まず、ベアナー氏と同様にハーバーマスの「公共圏」概念批判を行なうが、その論点は現代社会におけるメディア化された表象によるコミュニケーションを従来のブルジョア的コミュニケーションの正当性から悲観的、批判的に論じるのではなく、むしろそこで表象されるスポーツするパーフォーマティブな身体のあり様に新たな公共圏形成への可能性を見出そうとするものであった。しかし、それが表象されるスポーツイベントは、すでに政治的にも経済的にもがんじがらめに管理され、凡そ自由なコミュニケーションの空間として機能していないように思われる。ところが、そこにはそのような管理をずらして表象化されるスポーツする身体のパーフォーマティブな様式（mode）が存在する。この様式は、他でもありうるという意味での偶有性を有しており、そのズレこそが現代スポーツにおけるメディア化された表象における誰からもコントロールされえない「現われ出る余剰（emergent residual）」を生み出すのである。

阿部氏は、このような具体的事例を北京オリンピックにおけるトーチ・リレーに見ようとする。ストリートで展開された政治的抗議行動は、これまでの言語的、理性的な政治的デモンストレーションとは異なり、スポーツする身体のパーフォーマティブな空間のなかでの対立が、そのまま「何か社会的なもの」としてコミュニケートされたところに特徴がある。メディアは、このような「ストリートでの紛争」をスポーツの理想から逸脱したものとして解説した。が、阿部氏は、むしろスポーツする身体が従来のスタジアム内という空間から離れて、「ストリート」という空間においてイベント化され、メディア化されるなかに、新たな公共圏形成の可能性を見出そうとしていると言えよう。

・質疑応答と総括

フロアーからの質疑は、各報告者への議論内容の確認を中心に行なわれた。ベアナー氏の報告に対しては、公共圏形成における大衆スポーツの重要性からみれば物質的基盤の国家的保障こそが重要ではないか、あるいはその後の北アイルランドにおける和平プロセスとスポーツとの関係に関する見解が求められた。ベアナー氏は、物質的基盤の重要性について同意はするものの、その過程ではむしろスポーツ界からの公共圏形成の働きかけが重要なこと、また和平プロセスにおいてこそそのような視点が重要であると回答した。また、デ・ノップ氏の報告に対しては、エリートスポーツ

の成功が２カ国間における事例だけでなく、他の諸国においては同様な説明が可能かといった質問がなされた。彼によれば、６カ国（ベルギー、オランダ、英国、カナダ、イタリア、ノルウェー）における国際比較研究プロジェクトの分析枠組みと研究成果（Veerle De Bosscher et al., *The Global Sporting Arms Race: An International Comparative Study on Sports, Policy Factors Leading to International Sporting Success*, Oxford: Meyer & Meyer Sport, 2008）があり、スポーツ政策の効率性と効果が重要な予測因子であるとのことであった。また、公共圏におけるスポーツ政策は、異文化間や国際間において特殊性と普遍性をもっていることが確認された。阿部氏の報告に対しては、スポーツする身体をめぐるメディア言説とこれを超えた表象の可能性、およびその可能性に基づく新たな公共圏形成の可能性に関する見解が求められた。少なくとも、現時点におけるスポーツする身体の可能性を空間的に拡張していくことの意味は大きく、そのような解釈の視点が研究者に求められていることが確認されたが、一方でそのような解釈と事実をめぐる言説との相違やとらえ方の違いが今後さらに議論される必要があるとのことであった。

本シンポジウムのテーマは、ハーバーマスが示した「公共圏」概念を切り口にしてこの概念の今日的変遷とスポーツとがどのように関連し、現代社会におけるスポーツがどのような公共圏として具体的に立ち現われているのか、ということであった。ベアナー氏と阿部氏は、まずハーバーマスの「公共圏」概念に対して階級的、メディア的な視点から批判を加えた上で、前者は北アイルランドを事例としてその複雑な歴史社会的状況から階級的視点を堅持した議論を展開し、後者はスポーツイベントとメディアとの関係から言語的、理性的コミュニケーションを超えたスポーツする身体の可能性を議論した。デ・ノップ氏は、公共圏＝国家という政策的枠組みのもとで、競技スポーツという資源がどのように理解され、その成果がどのように問われているのかに関する政策的現状を報告した。

フロアーからの質疑応答を含め明らかになったことは、グローバル化した現代社会におけるスポーツの公共圏の拡大とその影響力の大きさという点であろう。これは、ローカリィティ、ナショナリティ、グローバル社会といったあらゆるレベルで求められている。しかし、求められる「公共圏」形成という観点から現代スポーツとの関係を考えてみると、その評価や課題はますます複雑になり、多様化している。かつて印刷術の発展から「幻想の共同体」として近代国家が論じられてきたが、グローバル・メディアの時代には、そのテクノロジーの発展から「メディア」を超えた身体や感性が新たな「公共圏」を形成していくのであろうか。スポーツ研究にとって、社会学的な「スポーツと公共圏」の議論は、ますますその深化が求められていると思われる。

26th July: Pre-Congress Workshops

(1) Invention and Authenticity in the Traditional Body Culture of Japan

Coordinator: **Lee Thompson** (Waseda University)

(2) Digital Sport

Coordinators: **Keiji Matsuda** (Tokyo Gakugei University), **Mayumi Ya-Ya Yamamoto** (Loughborough University)

日本の伝統的身体文化：本物と発明

Invention and Authenticity in the Traditional Body Culture of Japan

コーディネーター：リー・トンプソン（早稲田大学 スポーツ科学学術院）

国家形成の物語に近代化の過程を取り入れている多くの国々と同じように日本にも、近代（西洋）のさまざまな様式が導入される以前の「伝統的」な身体文化があったとされる。この伝統的身体文化とはどのようなものであり、そして明治以降それがどうなったのか、いろいろな説があろう。例えばそれが伝統芸能に生き残っているという可能性があり、または既に絶えているが復活させなければならないというのも一つの考え方であろう。あるいは「伝統的身体文化」といったものは元々なく、その概念と内容は近代に発明され、過去に投影されたという立場もあろう。

本ワークショップで日本における伝統身体文化の系統を探る目的で開催された。３人の報告者を迎え、国際学会でありながら日本語で発表していただいた。

最初の報告者は早稲田大学スポーツ科学学術院の寒川恒夫教授であった。テーマは「近代の身体へ―嘉納治五郎の柔道を例に―」（From the “Edo” Body to the Modern Body: Kano Jigoro and Judo）であった。柔道は、江戸時代に盛行していた柔術を母体に嘉納治五郎が明治 10 年代に創造したものとされる。寒川先生によると柔道創造に際し嘉納は、当時欧米の中心的な教育思想であった三育主義教育を原理として導入したそうである。今日我々がふつうに理解する柔道は嘉納のいう「柔道体育法」であり、そこには嘉納が柔道に期待した近代日本人の理想の身体が見えているそうである。その理想の身体とは物理学と解剖学と生理学によって個人と国家に有用な身体を形成するものであった。柔術で目指された宗教的・思弁的な心身の完成とは異質のものであったそうである。江戸時代の柔術は戦時と平時の殺傷捕縛術として編まれ、技術の修得を心の修行と重ね合わせる独自の構造を有していた。寒川先生によると不動智や本心や無心といった概念はこうした構造を基礎づけるもので、柔術や武術に限らず、およそ習いごと全体を律する江戸時代の修行文化の原理の位置にあったそうである。嘉納の柔道は柔術のこうした心法的身体観からの脱却を果たすものであった、というのは寒川先生の見解である。

次の発表者は倉島哲先生であった。大会の当時は京都大学人文科学研究所助教であり、マンチェスター大学客員研究員であった。報告のタイトルは「現代日本の武術教室における伝統的身体性―武術教室S流のケーススタディ―」（Traditional Corporality in a Present-day Japanese Martial Art School: A Case Study of the S School of Martial Art ）であった。倉島先生は

「日本の伝統的身体性を実体として捉えるのではなく、伝統的身体性に対する言及が現代日本の身体的実践においてどのように行われ、また、それが実践のありように対してどのような効果を持っているか」を検討した。題材として取り上げたのは、京都市に所在する武術教室、S流であった。倉島先生によるとS流の創始者であるM先生が提示する「伝統的身体性」についての言及は「日常の動き」と「スポーツの身体性」と「中国武術の身体性」との三つの身体性との対立において行われる。そして「『伝統的身体性』は、多様かつ断片的なコンテクストをつなぎとめる名目的な同一性にすぎないかに見える」そうである。しかし「『伝統的身体性』は、その歴史的存在とは別のレベルで、現在に生きる人々の実践と身体を形成する力を持つアクチュアルな存在である」との結論に至った。（倉島哲『身体技法と社会学的認識』世界思想社、2004）

最後の報告者は眞嶋亜有さんであった。眞嶋さんは当時、国際基督教大学アジア文化研究所研究員であり、大会直後の 2008 年 8 月からハーバード大学ライシャワー日本研究所ポストドクトラルフェローになる予定であった。報告のテーマは「清潔文明の逆説としての水虫―その日米比較と“伝統”的生活様式との関連から―」（*Mizumushi* and Athlete’s foot：Paradoxical Process of Cleanliness and Body in Modern Japan）であった。報告の英文タイトルにあるように、アメリカでは水虫のことを「athlete’s foot」といい、本学会にもってこいのテーマであるが、伝統的身体を吟味するにも意外と示唆に富む。眞嶋さんは日本の水虫を「清潔文明の逆説」として捉え、園田英弘の「逆欠如理論」に基づいて分析する。特に家の中で裸足で過ごすという日本の「伝統的」生活様式と水虫との密接な関係を社会・文化史的に考察した。比較の対象として「1920 年代～30 年代の米国有閑階級の生活文化における athlete’s foot の台頭」を取り上げた。（眞嶋亜有「水虫―近現代日本の栄光とその痕跡―」園田英弘編『逆欠如の日本生活文化―日本にあるものは世界にあるか―』（思文閣出版、2005 年、89 頁～128 頁））

以上、３人のたいへん刺激的な報告であった。コーディネーターの不手際で議論を深めることが出来なかったことは悔やまれる。

デジタルスポーツ
Digital Sport

コーディネーター：松田恵示（東京学芸大学）・山本真由美（ラフバラ大学）

はじめに

情報化が進む現代社会において、「スポーツ」という文化はもちろんのことそのような社会的環境の中で変容している。そもそも何を指して「スポーツ」と呼ぶのか、「スポーツ」という言葉の外延と内包は、社会を関数としたそのときの構築物でしかない。このように考えたとき、現代社会における一つの「スポーツ」の特徴には、「デジタル化」の側面を挙げないわけにはいかないのではないか。このようないわば「デジタルスポーツ」を、どのような社会学的問題として取り扱うことができるのか。ワークショップでは、いくつかの視角の提示や、「デジタルスポーツ」という課題がどのような社会学的インプリケーションを含むのかという課題に対して、会場に「Wii」というテレビゲーム機を設置し、実際に「デジタルスポーツ」を体験しつつ、アンドリュー氏からの基調講演を軸に議論を始めた。コーディネーターの松田からは、デジタルスポーツが「同期体験」という新しい遊びとして、情報化社会に出現した新しい身体形式を背景に持っているということが問題提起され、また浅野氏、佐川氏からは、デジタル・フレームにおける身体性、イデオロギーと情報といった問題性、逆にローカルでアナログなスポーツとの共通点などを指摘するコメントがいく

つか提出され、フロアーを含めて議論が厚くそして熱く交わされた。「デジタルスポーツ」へのアプローチの端緒を確実に開いたというのがワークショップの成果ではないかと思われるところである。

デジタルスポーツゲームにおける定量的ディスクールの考察(アンドリュー氏の報告からの抜粋)

コーナーキック–18、クロス精度–20、フリーキック–20、ロングシュート–19、タックル–10、勇敢さ–16、創造性–17、運動面–17、ジャンプカ–10、強靭さ–15。これらの評価は世界的な人気のあるセガのサッカークラブ経営シミュレーション、フットボールマネージャー 2008（双方向のデジタルスポーツゲーム、2007 年）（以下 FM 08）のユーザに対し、世界で最も有名な選手の一人を表すために使用される 36 項目のうちの 10 項目である。FM 08 では、デビッド・ベッカムは一連の定量的特質によって表現されるだけでなく、外見、ゴール、アシスト、マンオブザマッチ（サッカーの試合に於ける最優秀選手）賞、カード、タックル、成功したパス、枠内シュート、ファウル、平均評点も集計されて数字で表される。世界中の多くの人々がアナログやデジタルの様々なメディアを通じて、地球中で最も知られた顔の一つであるベッカムに遭遇している。「ベックス（ベッカムの愛称）」は雑誌、コマーシャル、テレビのバラエティ番組にセレブの妻ポッシュを伴って登場したり、単独で出演したりするが、デジタルゲームでも同様であるのは言うまでもない。対照的に、比較的目立たないシンガポールのSリーグのチーム、ウッドランドでプレイしているシンガポール人ミッドフィルダー、カマル・ナーシルについて考えてみる。 2008 年秋の時点で、ナーシルは祖国のために 1 試合戦ったが、祖国の人々以外で彼の能力に精通している人はほとんどいないようだ。 シンガポールに住んでいる人でさえ、ナーシルについてほとんど知らなかったかもしれない。 ナーシルはベッカムのような頻度でラジオやテレビ、雑誌等に登場することはない。さらに、ベッカムと異なり、ナーシルの顔は FM 08 に登場しないため、無名であることを一層際立たせているかのようだ。

スポーツに関する世界的なメディア環境では、ベッカム、タイガー・ウッズ、クリスティアーノ・ロナルド、ロジャー・フェデラーが受けるような注目を集める選手はほとんどいない。大スターがメディアの注目の大部分を浴びる一方、多くの選手は世に知られることなく、仕事に励んでいるのだ。こうした無名性を考えると、英国のサッカー界の下層レベルでこつこつ働くゴールキーパー、フィンランドのセミプロのアイスホッケーでいくらか稼ごうとするライトウィンガー、インドのアマチュアクリケット選手に関する知識を得るのは困難に思われる。しかし、多くのデジタルスポーツゲームは、以前には不可能だった方法で、ユーザにこうした選手たちと関わる機会を提供する。これはカマル・ナーシルのような人物に当てはまるかもしれない。FM 08 のユーザに対して、 ナーシルは遠く離れた無名のサッカー選手ではなく、むしろユーザが経営することを選択する可能性のあるウッドランドというチームの重要な一部であり、理解するようになり、深く感謝かもしれない。

だが、ナーシルに関するユーザの知識を特徴付けているのは何なのだろう？ デジタル版のナーシルをどのようにしてゲームユーザに知らせるのだろう？ ゲームテキストがナーシルとベッカムの両者のスキルを仲介する方法、つまりそれぞれの特性および実績を示すために使用される定量的評価システムに一つの答えがある。すべてのデジタルスポーツゲームが FM 08 が採用する定量化のレベルほど詳細であるという訳ではないが、デジタルスポーツゲームの大多数が数値データの重要性を強調している。数値データは、印刷物、テレビ、インターネットで主流の情報源が提供する従来の統計報告をはるかに上回る定量的なシステムで表されることが多い。

本報告の目的は、経済理論およびテイラー主義、 総合品質管理、ネオリベラリズムの適用にお

けるディスクールの潜在的本質を考察することによって、デジタルスポーツゲームテキストにおける身体の定量化を説明することである。 その次にデジタルゲームテキスト FM 08 の解析に対するディスクールを取り上げ、FM 08 に関わるユーザにとってのディスクールの重要性を考察する。

本報告では、FM 08 が選手のパフォーマンスおよび選手の身体の双方に関する定量化を重要視することを、テイラー主義、TQM、ネオリベラリズムのコンテキストを通して説明できることを論じている。数字を多用するこのデジタルゲームのテキストは、労働力の測定や、計算可能な他者と交流する計算可能な自己を明確に表現することができる主観性に、定量的アプローチを取り入れていることはほぼ間違いない。確かに FM 08 は市場で多岐に渡るデジタルスポーツゲームを完全には表してはいない。ここで提示した解析は、経営シミュレーションや、特にプロスポーツを基にしたスポーツゲームにより一層適用できるかもしれない。しかし、定量化のディスクールはある程度までは、市場のデジタルスポーツゲームの大部分で現れているように思われる。

FM 08 の設計者がゲームを導き、まとめる原理として数字を使うことを選んだ理由について疑問に思う人がいるだろう。設計者はおそらく、数字というどこにでもある存在を認め、認め続けるプロセスについて、追加情報を提供することができるからだと答えるかもしれない。スポーツゲーム定量化ルールになると思われるものの例外を考察することも有益であろう。この論文を執筆している時点で、定量化というやり方に従うことを拒む、プロスポーツを土台にしたゲームがどうやら 1 つだけある。それはフリープロデューサーであるマック・ハワード（2004 年）が開発した シック・アズ・パロット（Sick as a Parrot）というタイトルのサッカー経営ゲームである。シック・アズ・パロットに唯一の定量化が発生するのは、ユーザのチームがプレイする試合のスコア程度だ。ユーザは数値情報ではなく、完全に言語情報を通じてゲームと相互作用するのである。ハワードのような設計者を調査すると、スポーツゲームに関連するより典型的な設計決定にさらに深い洞察を提供できるかもしれない。

数字を基礎とするデジタルスポーツゲーム業界において、ハワードの作品はただ一つの例外であるように思われる。過去 25 年に渡って現れていた傾向が続くのなら、ゲーマーは今後、スポーツゲームで数字が減るどころかむしろ増えているのを見るのかもしれない。その結果、こうした定量的ディスクールが新規メディアでのスポーツ経験にさらに普及するようになっていることから、研究者はその重要性により一層の注意を払うべきであろう。 （訳責　松田恵示）

26th July: Welcome Party

歓迎パーティは、久しぶりに会った人も、初めて会った人も、和気あいあいの和やかな雰囲気のなかで始りました。開会式は、伊藤公雄会長と杉本厚夫実行委員長の歓迎の挨拶、スティーブ・ジャクソン会長のお礼のあいさつがあり、アトラクションは、京都大学の能楽研究会に、特設のステージで「高砂」を舞っていただきました。日本の伝統文化に触れて、参加者の皆さんには、日本での開催を印象づけたようでした。

28th July: Farewell Party

さよならパーティは、山口秋月さんの尺八と、山口朋子さんのお琴による演奏で始まりました。秋月さんが虚無僧姿で登場されるというサプライズに始まり、演奏曲に「イマジン」が披露されると参加者の皆さんの顔に笑顔がこぼれ、一緒に口ずさんでいらっしゃいました。今回の大会のテーマである「Sport and Society at the Crossroads」に相応しく、日本の伝統的な楽器で、西洋音楽を演奏するというまさしく音楽における Crossroads でした。

次回開催地のユトレヒト（オランダ）の紹介や大学院生 Sarah Gee(U of Otago)の論文表彰があり、皆さんの笑顔に、今回の大会に満足していただいている様子がうかがえました。

27th・28th・29th July: Oral Presentation

口頭発表

口頭発表は 38 セッション 167 演題ありました（資料参照）。主なテーマについては、下記のとおりです。

スポーツとグローバリゼーション（Globalisation and Sport）、スポーツと国民性（Sport and National Identity）、スポーツと人格形成（Sport and Identity Politics）、スポーツと健康（Sport and Health）、スポーツとメディア（Media and Sport）、スポーツとジェンダー（Gender and Sport）、スポーツと開発（Sport and Development）、メガスポーツイベント（Mega Sporting Events）、 スポーツと政治（Sport、 Politics and Policy）、 スポーツによる社会的統合（Social Integration Through Sport）、スポーツサブカルチャー（Sport Subcultures）、 スポーツと教育（Sport and Education）、 アジアのスポーツ（Sport in Asia）、 スポーツと逸脱（Sport and Deviance）、スポーツと環境（Sport and The Environment）、 スポーツ制度（Sports Systems and Structures）、スポーツフォウオール（Sport for All）など。

現代のスポーツ社会学の中心的なテーマが多く発表されましたが、それだけにとどまらず、これからテーマとすべき課題提起も行われ、発表内容の豊かさを感じられる口頭発表でした。

また、それぞれの会場で、セッションの座長を務められた先生方のリードのもと、とても熱心な討議が行われたことが印象的でした。

27th July: Poster Session

ポスターセッション

ポスターによる発表は 23 題でした（資料参照）。それぞれの会場で自分の研究発表を行い、来場した人と少人数で活発な議論が交わされました。1 時間という短い時間でしたが、その分、質の高い議論になったようです。また、英語だけではなく、参加者に応じて、他の言語による議論が行われていたこともこのセッションの特徴でした。

おわりに－謝辞にかえて－

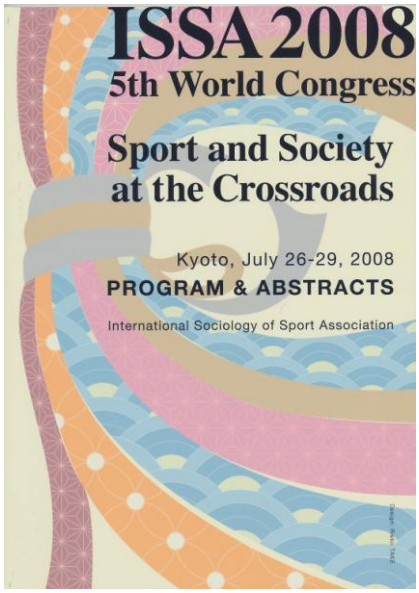
杉本厚夫（関西大学）

ISSA 京都大会から 2 年が経過しました。報告が遅くなってしまったことを心からお詫び申し上げます。

しかし、私の中では、昨日のことのように思い出されます。

当初、夏の暑い京都での開催で、参加者の体調を心配していましたが、幸いにも期間中はそれほど暑さを感じることがなく、皆さん元気に大会を終えることができました。ただ、28 日の午後、京大の文学部から芝蘭会館へ会場を移動する前に雷雨があり、やきもきしましたが、ちょうど移動の時間だけ一時的に止んでくれ、実行委員会の運の強さを感じました。

また、一般公開した「オリンピック・シンポジウム」では、同時通訳をつけました。国際学会を初めて経験したという一般の人は、「同時通訳のおかげで良く理解でき、オリンピックの知らない一面を知ることができて、北京オリンピックの見方が変わりました」と大変喜んでお帰りになったのが印象的でした。



プログラムやポスターのデザインは、東京学芸大学の嶽里永子さんにお願いし、左のような日本の伝統的な文様をアレンジした素晴らしいデザインをしていただきました。海外の方々からは、とても日本的で、しかも、テーマの「The Crossroad」を実にうまく表現していると大変好評でした。

実行委員会の皆様には、ご支援のお願いに企業等に訪問してもらい、多くの協賛金をお集めいただき、何とか赤字にならずに決済できてほっとしております。この企業等のご支援は、単に協賛金をいただいただけではなく、国際スポーツ社会学会大会を日本で開催することの社会的な意義をご理解いただけたものと思っております。と同時に、スポーツ社会学の社会的認知も得られたものと考えております。

さらに、今回この報告書をまとめるにあたり、キーノートレクチャー、シンポジウム、ワークショップと企画していただいた実行委員会の方々にご執筆いただき、報告書としてここにまとめることができました。心よりお礼申し上げます。

このように、国際大会が成功裏に終わったのも、実行委員会の皆さんの献身的なご努力のおかげです。お一人お一人のお名前を挙げてお礼申し上げなくてはならないところですが、この紙面を借りてお礼申し上げる次第です。

とりわけ、京都大学の皆さんには、会場の準備からレセプションの設定、昼食等の手配、受付などなど、陰ながら支えていただき、この大会を成功に導いていただきました。ほんとうにありがとうございました。

最後になりましたが、ご参加いただいた日本スポーツ社会学会、国際スポーツ社会学会の会員の皆さん、さらには公開シンポジウムに参加いただいた一般の方々には、大会を盛り上げていただきまして、感謝申し上げます。

この大会が、スポーツ社会学のさらなる発展の一助になれば幸甚です。

2008 第5回 ISSA 世界会議京都大会運営組織

＜組織委員会＞

委員長：スティーブ・ジャクソン Steve Jackson (Univ. of Otago, NEW ZEALAND)
副委員長：伊藤公雄（京都大学）、菊幸一（筑波大学）
委員：

Elizabeth Pike (Univ. of Chichester, U.K.)
Christopher Hallinan (Victoria Univ., AUSTRALIA)
Fabien Ohl (Univ. of Lausanne, SWITZERLAND)
Kimberly Schimmel (Kent State Univ., USA)
Gertrud Pfister (Univ. of Copenhagen, DENMARK)
John Sugden (Univ. of Brighton, U.K.)
山口泰雄（神戸大学）、飯田貴子（帝塚山学院大学）、松村和則（筑波大学）、
中島信博（東北大学）、内海和雄（一橋大学）

＜実行委員会＞

委員長：杉本厚夫（京都教育大学）
副委員長：山下高行（立命館大学）、黄順姫（筑波大学）
事務局：松田恵示（東京学芸大学）、松居和子（京都大学教務補佐）、
企画委員会：清水諭（筑波大学）、
中江桂子（成蹊大学）、西山哲郎（中京大学）、高橋義雄（名古屋大学）、
坂なつ子（一橋大学）、リー･トンプソン（早稲田大学）、黒田勇（関西大学）、
平井肇（滋賀大学）、小椋博（龍谷大学）
会場・抄録委員会：高橋豪仁（奈良教育大学）、海老島均（びわこスポーツ大学）、
川口晋一（立命館大学）、東元春夫（京都女子大学）、
伊藤克広（兵庫県立大学）
広報委員会：野川春夫（順天堂大学）、
原祐一（東京学芸大学連合大学院）宮坂雄悟（東京学芸大学連合大学院）

＊所属は 2008 年 7 月当時

協賛企業

世界思想社、エーシック株式会社、ジャパンリード株式会社、
三井住友海上火災保険株式会社、東京オリンピック招致委員会、
オムロンヘルスケア株式会社、株式会社ワコールホールディングス、
横浜ゴム株式会社、星和電機株式会社、有限会社　市村出版、笹川スポーツ財団、
特定非営利活動法人フレンドリー情報センター、大修館書店、宝酒造、

資　　料

Sessions Details

SESSION 1 July 27: 10:30 -12:30

Room 1) Globalisation and Sport I — Chair: Soon-Hee Whang

1) Richard Giulianotti: Sport, Globalization and Development: Making the Global Civil Society
2) Paul Close: Olympiads in Transition and the Pace of Globalization
3) Hanspeter Stamm and Markus Lamprecht: Knowing the Winner Before the Game Starts: Success in International Football and Relationships of Structural Dependency in the World System
4) Barbara Humberstone: Adventure sport, Gender and Globalisation

Room 2) Sport and National Identity I — Chair: Alan E.S. Bairner

1) Alan Ewen Scott Bairner: Footballers' Lives: Soccer, Irish nationalism and Northern Ireland
2) John Kelly: Regionalism and National Identity in Scottish Sport
3) Andreas Niehaus: Swimming for Identity, or National Identity and Swimming in Modern Japan (1868-1932)
4) Fumiaki Shishida: The Invention and Acculturation of Modern Japanese Martial Arts: Focusing on Judo and Aikido
5) Glos Wing-Yan Ho: Beijing Olympics as Nationalistic Education: A Study of Hong Kong Students' Negotiating between Local and National Identity

Room 3) Sport and Identity Politics I — Chair: Elizabeth Pike

1) Elizabeth Pike: The interaction order' in later life sporting activity.
2) Young-Kyung Park, Yasuo Yamaguchi: Research into Lifelong Sports Activities in Korea-focusing on middle-aged and elderly hikers in the Seoul region
3) Agnes Elling: Extraordinary bodies: transgender experiences of shame and pride in sport
4) Masashi Takai: Homosocial groups and women's identity: the case of female managers in Japanese high school sports

Room 4) Sport and Health — Chair: Camilla Obel

1) Annette Michelsen la Cour: Welfare, health and the inclusion of socially weak children in the sports clubs:

Which are the strengths that characterize sport clubs in relation to health and social inclusion?

2) Claire Perrin: How to build a physically active patient? New professional dynamics in French diabetes networks
3) Shiho Sato: The Importance of Lay Knowledge: Discourses Involving Health in the Japanese Context
4) Masayuki Takao: The Politics of "Active Aged": From a case study of a measure of health promotion for aged person
5) Parissa Safai, Jean Harvey and Phil White: It's simple. Poor people just don't do sport! : Exploring the Social Determinants of High Performance Athletes' Health

Room 5) Media and Sport I — Chair: Steve Jackson

1) Jay Scherer, Michael P. Sam: Policing the (cyber) agenda: New media technologies and local stadium debates
2) Yoonso Choi, Eunha Koh: New Media and Social Movements in Korea
3) Yomee Lee: A Quest for a New Identity: The Hines Ward Syndrome in Korea
4) Sarah Gee: Hypermasculine Ad-versity? Exploring the Production Elements of the National Hockey League's "Inside the Warrior" Campaign

Room 6) Gender and Sport: Female Sport Experience — Chair: Agnes Elling

1) Hsiu-hua Tsai, Wan-chen Lu: The Study of Sport Consciousness of Female Residents in Taipei
2) Carly Adams: International Opportunities and Local Experiences: Betty White, Jean Hales, and Women's Athletics in Canada
3) Mark Christopher John Stoddart: Turns are for Girls: Gender and Skiing in British Columbia, Canada
4) Eri Mizuno: Difference among women in sports: a case study of professional women surfers in Japan, United States and Australia
5) Sungjoo Park: Women and Sports in South Korea

SESSION 2 July 27: 4:00 -6:00pm

Room 1) Media and Sport II — Chair: Kari Fasting

1) Kohei Kawashima: Representing "Black Athletes" in Contemporary Sport Cinema
2) Kyoung-Yim Kim: Translocation of Korean Women in the LPGA Tour: Gendered, Fluid, and Heterogeneous Orientalism in US Sport Narratives
3) Ka Young Kim: Forever the moment: the women athletes of the unpopular sports in Korean sport film

4) Ik Young Chang and Jane Crossman: The Comparison of Newspaper Coverage of the 2004 Athens Paralympic to Olympic Games
5) Asuka Tomaru: Human Rights Awareness in Sports Coverage: How Could Better Guidelines Improve Fairness and Diversity?

Room 2) Sport and Development — Chair: Richard Giulianotti

1) Kevin M. Young: Defiance under Fire: Sport, Peace, and Naivety
2) Chiaki Okada: International Development through Sport from the Perspective of ODA Strategies of DAC Countries
3) Depei Liu, Dongxiao Liu, Junling Bai: Organization and the Experience in the Development of Sport in China
4) Yoshihiko Ohnuma: Professional Sports and the Revitalization of 2 Cities in Japan: The Case Studies of Sapporo and Sendai
5) Abe Junji, Masasi Sasase: Popularization of the mountaineering and Conservation for natural environment

Room 3) Mega Sporting Events — Chair: Kim Schmmel

1) John David Horne: Material and representational legacies of sports mega-events: The case of the UEFA Championships
2) Scarlett Cornelissen: Of proprietors and stakeholders: the political economy of planning and legacies of the 2010 FIFA World Cup™
3) Kimberly S. Schimmel: Mega-sport in the neoliberalizing city

Room 4) Sport, Politics and Policy I — Chair: Mike Sam

1) Ulrike Mueller: The role of sport in European Union politics
2) Fumihiro Kaneko: The Governance of Urban Sports Policy under New Labour -A Case Study of Sheffield in the UK
3) Margaret Groeneveld: The Social Role of Sport Governing Bodies: The co-production, co-management, co-governance model of federations as civil society organisations
4) Michael Sam: Sport Governance Paradoxes in Canada and New Zealand: From "Case Building" to Targeting
5) David Hassan: Who 'Owns' the Game? Issues and Challenges in the Governance of Club Football in Britain

Room 5) Sport and Identity Politics II — Chair: Chris Hallinan

1) John Sugden, Thomas Carter: The USA and Sporting Diplomacy: comparing and contrasting the cases of table tennis with China and baseball with Cuba in the early 1970s

2) Michael A. Robidoux: Sport and the Colonial Difference in a Northern First Nation Community
3) Po-Hsiu Lin: Indigenous Peoples and Baseball in Taiwan
4) Ramon Spaaij: Collective representations and the quest for recognition: the politics of football and fan identities in Catalonia
5) Wen-Tseng Chu: A Study on the Small-scale Sport Event Tourism: the Case of Japanese Tourists to Asian Baseball Championship 2007 Held in Taiwan

Room 6) Social Integration Through Sport: Education Chair: Takayuki Yamashita

1) Woo Suk Kim, Kwang Leong Han, Ki Sup Kim, Hyo Min Kang: How college students' sports activity has effect on adjustment to college and mental health
2) Hyun Woo Kim, Kwang Leong Han, Hyo Min Kang: Preschool teachers' stages of concern about Physical Education
3) Woo Seung Kim, Kwang Leong Han, Kisup Kim, Hyo Min Kang: How baseball playing in a elementary school team affects physical self-concept and decision on future life – keep or quit playing baseball
4) Kang Young Lim, Kwang Leong Han, Seung Hee Yoo, Hyo Min Kang: How physical education in elective course has effect on interpersonal skills and satisfaction with college life

Room 7) Normalised Subjects and Depoliticized Bodies: Women's Sport under Neo-liberalism Chair: Mary McDonald

1) Katherine Jamieson: Title IX, Fictive Histories, and Liberated Bodies
2) Michelle T. Helstein: Queering a Sport Anti-Homophobia Campaign
3) Mary McDonald: The Women's National Basketball Association and Neo-Liberal Imaginings of Sexuality

SESSION 3 July 28: 8:00 -10:00am

Room 1) Open Topics: Sport Subcultures Chair: Jin Kyoung Park

1) Peter Mindegaard: Changing patterns in Danish team sports
2) Min Chul Kim, Seounghyun Oh: An Ethnography on Club-Experience of Windsurfing at Han-river
3) Seung-Ah Yang, Sunyong Kwon: Street dance, re-exportation of imported culture: A study of how an introduced western subculture transformed into the main content of the Korean Wave
4) Koji Kobayashi: The Transpacific Sport Gaze: Japanese Post-Industrial Management at Asics & Mizuno

Room 2) Open Topics I — Chair: Tetsuro Nishiyama

1) Peter Warning, Kristine Toohey, Dwight Zakus, James Henri: The Sociological Foundations of Olympic Studies: Descriptor Profile Analysis of An International Olympic Studies Journal
2) Tadashi Watari: A Historical Sociology of Sport for the Disabled in Japan: From Life history of Athletes Participated in the Tokyo 1964
3) Mutsumi Ono, Linda Cronin, Sue Reeves and Eileen Kennedy: Food culture, habitus and professional football
4) Carla Vidoni, Lawrence Judge, Emese Ivan: Perceptions of Fair Play Behaviors in Physical Education and Coaching
5) Ryuichi Takeda, Masashi Sasae, Tomoshige Takanashi, Wataru Yasaki: Finnish Kendo practitioners, how understand Japanese traditional view

Room3) Open Topics II — Chair: Luis Ottavia

1) Akira Kurashima: Body Techniques, Efficacy and Tradition: A Case Study of a Tai Chi Class in Manchester
2) Tomonori Ishioka: The Social and Sensual Logic of Boxing in Contemporary Metro Manila: Toward a Sociology of Sport from the Urban Poor
3) Shinta Sasao: The promotion of Bowling in Japan: amusement or sport?
4) Yuki Kobayashi: A Meaning of The Speed and Local Identity in The Public Motorcycle Road Race: A Case of The Isle of Man TT Race
5) Kenji Enami: An Empirical Study on a Regional-Activation by Sport Camps and Events: The Case of Kumano City

Room 4) Sport and Education I — Chair: Koichi Kiku

1) Dawn Aquilina, Ian Henry: Olympic and Professional Athletes and University Education in Europe: a life-story based analysis of elite athletes educational careers in Finland, France and the UK
2) Aaron Miller: Sports and Educational 'Violence': Towards a Cultural Understanding of Corporal Punishment In Informal Educational Settings in Contemporary Japan
3) Jin-Kyung Park, Jun-Ho Kim: Conceptualization of image of sports hero among elementary school students
4) Hitoshi Ebishima: Lost in Translation: Cycling limitation in Japan
5) Yuichi Hara: Social action in Physical Education: Dualism between 'sporting act' and 'educational act'

Room 5) Sport in Asia — Chair: Tetsuya Sagawa

1) Po-ya Liao: Case Study of Development of Sport Tourism in Taiwan: 10,000 People Sun Moon Lake Traverse

2) Chih-fu Cheng, Wan-chen Lu, Hsaio-chang Chao: A Study of Baseball Fans' Participative Behavior Intention Model in Taiwan
3) Junichi Ikemoto: Sports and Changes in Social Stratification: The Case of Wushu (Kong-Fu) School in China
4) Byeong Seok Min, Chun Woo Lee: Territoriality Overcoming Process of Transferred Soldier's Children through the Taekwondo Discipline
5) Ani Tung: Modern Sport and National identity in the national team called "Chinese Taipei"

Room 6) Media and Sport Ⅲ — Chair: John D. Horne

1) Shota Kimura: Structural Analysis of the ROCKY, Movie Series
2) Hideyuki Yokota: Semiotical Analysis of a Manga "CAPTAIN TSUBASA"
3) Yasuo Shimith: About the live television commentary of the IAAF World Championships in Athletics Osaka 2007: Mainly on the words
4) Sho Ki Oh: The Ambiguity of Liu Xiang's Reportage in Chinese Media report: A case study of reportage of Liu Xiang winning 110m hurdles at the 11th World Athletics Championship in 2007

Room 7) Open Topics Ⅲ — Chair: Hyo Min Kang, Kwang Leo Han

1) Miho Osaka: A sociological study for the historical Hibiya Park in Japan: Some aspects of the modernization of public park and the modernization of behaviour
2) Shintaro Inaba, Yasuo Yamaguchi: Expectations and satisfaction for the activity types in sport volunteers in IAAF World Championships in Athletics Osaka 2007
3) Yasuo Yamaguchi: A Longitudinal Study of Importance-Performance Analysis of Sport Volunteers at the IAAF World Championships in Athletics Osaka 2007
4) Ken Kageyama: Critical Consideration on the Polotical Characters of Sports World
5) Wan-chen Lu: The development of leisure activity in Taiwan since 1945

SESSION 4 July 28: 10:30 -12:30

Room 1) Looking for transgression: The limits of lesbian and gay perspectives on sport — Chair: Mary Louise Adams

1) Samantha Jane King: Virtually Normal: On the Limits of Lesbian and Gay Studies in the Sociology of Sport
2) Mary Louise Adams: Disordered gender: On the eclipse of effeminacy in queer sport and queer sport studies

3) Amy S. Hribar: Tomboys and glamazons: Gender and sexuality in contemporary sport/culture

Room 2) Social Capital and Sport: Exploring the Dark Sides — Chair: Fabien Ohl

1) Simone Baglioni, Cristina Fusetti & Dino Numerato: Social Capital and Sport: Exploring the Dark Sides
2) Fabien Ohl, Vanessa Lentillon and Christophe Brissonneau: Consequence of the fight against doping on cyclist' s social ties and capital
3) Dino Numerato: Apples, Pears and Carps: Notes on Corruption in Football
4) Jerzy Edward Kosiewicz: Necessary and Harmful Aggression in Sport

Room 3) Media and Sport Ⅳ — Chair: Keiji Matsuda

1) Evdokia Pappa, Helen Pussard, Eileen Kennedy: The Greek media construction of doping during the Athens Olympics
2) Seongsik Cho, Lee Seob Maeng: Comparative analysis for Korean and Japanese major newspapers' coverage of Korea vs. Japan matches in World Baseball Classic
3) Fumihiko Saito: Pro Wresu: The Fantasy of Professional Wrestling Japanese Media Had Shared and Kept Over 50 Years
4) Yoshiro Shiraishi: Why could the sports comics "Slam dunk" get 100,000,000 fans? Media technology and discourse in big selling sports comics
5) Isamu Horiuchi: Producing Realism and Reality in an Artificial Environment: The Mixed Martial Arts Boom in the U.S.

Room 4) Globalisation and Sport Ⅱ — Chair: Haruo Nogawa

1) Naoki Chiba: Globalization of Basketball and Reorganization of Elite Basketball in Japan
2) So Ye Yang: Foreign Footballers in K-League: Migration and Adjustment
3) Toyokazu Ishihara: One Aspects of Baseball Diffusion: The Globalization of Sport Industry in Israel Professional Baseball
4) Seung-Back Han: The Semi-Peripheral States of K-League in World-System
5) Tien-Chin Tan, Barrie Houlihan: Elite Football and Basketball: the impact of globalisation and China's sport policy

Room 5) Sport, Politics and Policy Ⅱ : The Olympic Games — Chair: Wolfram Manzenreiter

1) Robert E. Sparks, Hayfa Abichahine, Dylan Sparks, Alexandra Tanb and Brian Wilson: One world, one dream,

two torch relays: Human rights in Tibet and China's nationalist Olympic aspirations

2) Toshiyuki Yamanokuchi, Jian-Zhun Zeng: Reconsideration on the Torch Relay of the Beijing 2008 Olympic Games: The Meaning of the Determination from Chinese Taipei Olympic Committee of Taiwan
3) Weiming Wang: Elite Sport Governance Reform during Olympic Preparations: the case of the Beijing Olympiad
4) Kazuo Uchiumi: Examination of the criticism and the denial of the Olympics
5) Hsin-Yi Tsai: The Evolutions of the Taiwanese National Identity in the Olympics

Room 6) Gender, Fitness, Leadership — Chair: Eunha Koh

1) Mikyung Hwang, Hanjoo Kim: Shaping New Body: Feminine Bodies and Sports in Korea
2) Eunha Koh: Fit body in on/off-line media: The production of fitness discourse and the fitness consumer in South Korea
3) Kyungsik Lee, Min Chul Kim: Leisure Experiences of married female teachers: Ethnographic approaches
4) Cristina Fusetti: The Use of Social Capital in Developing Paths towards Gender Equality in Sport
5) Ruth Jeanes, Tess Kay: 'It's just good having someone who encourages you and doesn't shout at you': Examining leadership and girls' sports participation

---

SESSION 5 July 28: 1:30 -3:30pm

Room 1) Gender issues — Chair: Bente Ovedie Skogvang

1) Rieko Yamaguchi: Sport, Health, and Gender Identity in Japan
2) Brent Douglas McDonald: Learning Masculinity through Japanese University Rowing: jōge kankei and hierarchical relationships
3) Satoko Itani: I am not Sick: Transgender People and Modern Sport
4) Hyunmi Heo, Bona Lee: A Study on the Sexual Abuse of Professional Female Athletes in South Korea
5) Bente Ovedie Skogvang: Elite football players in Norway and experiences about sexuality: 'Lesbians are accepted, but gays do not exist.'

Room 2) Open Topics: Sport and Deviance — Chair: Michael Atkinson

1) Michael Atkinson, Kevin Young: Speciesism and Animal Exploitation in Sport
2) S.P. Morris: On Sport Hunting

3) Maarten Van Bottenburg: The great unknown. Discrepancies between categorical and personal reputations of elite athletes
4) Jason Laurendeau: Tarred and Feathered: Norms, Deviance and Social Control in BASE Jumping

Room 3) Open Topics: Sport and The Environment — Chair: Bernd Schulze

1) Bernd Schulze: Sport and global warming
2) Ching Li, Chun Chi Wang: The Effects of Climate Change on Hiking Behavior

Room 4) Sport and National Identity Ⅱ — Chair: Hiroki Ogasawara

1) Hiroyuki Morita: The Discursive Construction of Japanese Communality in the Media Reporting on the National Football Coach
2) Rikidou Tomikawa: Internationalisation of O-zumou and the media discourse: On Mongolian-born sumou wrestlers
3) Atsuhisa Yamamoto: A critique of the revival of traditional bodily practices in contemporary Japan
4) Seongbin Hwang: Hiroshima and Politics of National Memories of the Bomb and Peace: a Case study of 1994 Hiroshima Asian Games.

Room 5) Sport, Politics and Policy Ⅲ — Chair: Kevin M. Young

1) Suguru Norimatsu: The politics of Prize Fighting: Nobusuke Kishi's policy toward Asia and the deployment of Oriental Champion Carnival in the postwar Japanese diplomacy.
2) Jung Woo Lee: Political Propaganda and Nationalism in North Korean Sport
3) Junichi Hashimoto: Policy making of a football stadium construction in Japan after the 2002 FIFA World Cup
4) Mayumi Ya-Ya Yamamoto: Comparing the Mechanisms of Transnational Influence Manifest at the Domestic Level: development of anti-doping policy in Japan and the UK

Room 6) Social Integration Through Sport: Community — Chair: Kazunori Matsumura

1) Simone Baglioni: Social integration of youth through sport: The case of the jail for minors of Nisida, Italy.
2) Gerardo Orellana: Sport "aficionamiento", identification and social integration
3) Saskia de Groot-Nuijten: Involving ethnic minority youth in sport: how effective are sport clubs in the integration process?
4) Luis Otavio Teles Assumpcao: Brazilian football and anomic process
5) Naofumi Suzuki: Signposting to better lives: reconceptualising the process of social inclusion through sport

SESSION 6 July 29: 10:30 -12:30

Room 1) Sport Systems and Structures — Chair: Gertrud Pfister

1) Camilla Obel, Roslyn Kerr: 'The meaning of sport': an exploration into debates about sports evaluation systems
2) Gertrud Pfister: Work-life integration and voluntary leadership: theoretical considerations and results of an interview study
3) Hiroko Maeda: Issues Regarding the Incorporation of Community Sports Clubs in Japan
: With Emphasis on the Policies of the Comprehensive Community Sports Clubs and NPOs

Room 2) Open Topics Ⅳ — Chair: Kyung Hun Lee

1) Christian Tagsold: Babylonian tales of sports mega-events: Meaning, interpretation and authenticity during the World Cup 2006
2) Katsuhiro Ito, Yasuo Yamaguchi: A Qualitative Study on the Organizational Culture of the Community Sports Clubs in Japan
3) Isao Okayasu, Yukio Kawahara, Haruo Nogawa: Community sport clubs and social policies
4) Yugo Miyasaka, Yasuo Yamaguchi, Kazuo Takaori: Uniqueness of communications in transmission of Play
5) Yasuko Tsuneyuki: Factors influencing exercise self-efficacy and stages of exercise behavior changeamong middle-aged and older adults

Room 3) Sport and Education Ⅱ — Chair: Junichi Hashimoto

1) Chan Woo Ahn, Goo Myeung Kwon, Bong Woo Lim: Athletes 'Deulruri' Life-World of University Sports Team
2) Atsushi Nakazawa: School sports or community sports? An empirical study regarding the impact of household backgrounds on adolescents participation in school and community sports
3) Haruo Higashimoto: American football in Western Japan: Sponsors/Patrons for College Games
4) Chie Murakami: A sociological analysis of the meaning of eyes from others in P.E class
5) Pintu Modak: Globalizing Sports: Capitalism and Domination

Room 4) Sport for All — Chair: Kazuo Uchiumi

1) Chih-Hu Cheng, Ray-Yi Tseng: The relationship between parental support and sport participation behaviors of senior high school girls
2) Kwang-ok Kim, Jong Young Lee: The deepening process of the elderly people's involvement in aquarobics

3) Eun Young Kang, Young Ho Kim, Hyoung Muk Lee: Golf gambling participants' interaction patterns during golf rounding
4) Ryoko Akiyoshi, Yasuo Yamaguchi: A Study of the Relationships Service Quality, Customer Satisfaction and Behavioral Intentions among users at Public Sport Facilities in Japan

Room 5) Social Integration Through Sport Practices and Meanings

Chair: Jong Young Lee

1) Byeong Chul Kim, Kwang Leong Han, Hyo Min Kang, Tai Hyung Kim: Relations between working women's participation in sports activities in a company and career success
2) Ruud Stokvis: Sport as a religion
3) Ali Zarei, Mahboben Chaman Pira: The Social Benefits of Intramural Sports
4) Kyung Hun Cho, Kwang Leong Han, Eun Ju Ham, Hyo Min Kang: The psychological characteristics of people who enjoy participating extreme sports have any effect on exercise obsession
5) Kanji Kotani: Social Bodies in Resonance: Becoming of Communication and Rhythm in Sports

Room 6) Sport and Education Ⅲ

Chair: Hitoshi Ebishima

1) Eriko Sakamoto: The Influence of Achievement as Social Context in Physical Education: A comparative research of Japanese and Danish children
2) Kouhei Kobayasi: A Survey of the Career Formation for a Physical Education Teacher in Japan
3) Yutaka Masano: The Influence of Nonverbal Communication in P.E. Class: Based On Grounded Theory
4) Peter Donnelly: Interschool Sports and Secondary Education in Canada: The Struggle Between Elite Sport and Sport for Education

Poster Session

July 27: 6:00-7:00 pm:

1) Horng-ju Deng: Ability and disability: the learning adjustment of a hearing impaired student in physical education department
2) Ki Sup Kim, Kwang Leong Han and Hyo Min Kang: Collective and Regional Egoism on Facilities for Physically-Challenged People
3) Maria Prat, Susanna Soler: Critical Observatory of Sport: A website to promote critical attitudes to sport social issues and media
4) Kang Hyomin: The Relationship between Environment Attitude and Environmental Protection Behavior of Scuba Diving Participants
5) Susanna Soler, Maria Prat: The Women Sport Week: an equality plan in an university Physical Activity Center
6) Osamu Takamine, Takako Iida, Keiko Itani, Ayako Ota, Kimie Kumayasu, Yasuo Yoshikawa: Influence of Gender on Perceptions among Japanese College Students of Sexual Harassment Inside Sport Settings
7) Kimie Kumayasu, Ayako Ota, Keiko Itani, Osamu Takamine, Takako Iida and Yasuo Yoshikawa: Characteristics of Perceptions of Sexual Harassment among Female College Students Both Inside and Outside the Sport Setting –In Relation to Their Personal Experience
8) Shi Zou, Depei Liu: China Sport and Development of City
9) Ryozo Kanezaki: Some Thoughts on Factors Supporting Popularity of Sport
10) Shiori Nagatsu: Professional sports teams and local urban communities
11) Akram Atighehchi, Fatemh begom Mirmoezi and Mahmood Hakamy: Effects of physical and mental health due to physical activity on Zanjanian 30-35 years old women's happiness
12) Mitsuhiro Sato, Akio Kondo and Takuya Kouyama: Evaluating to the Health Effect of Using a Community-based Sports Club by Monetary Value
13) Kuan Chun Lin, Chih Fu Cheng: A Study of Job Stress, Social Support and Job Satisfaction for Karate Coaches in Taiwan
14) Hsiao-chan Chao and Chien-wen Chen: A study of the flow experience involvement and consumer goods attribution of bicycle hobbyists in Taiwan
15) Ritsu Ainara, Masaki Nagamatsu, Makoto Yokoyama, Masami Nagaoka: College students surveyed by questionnaire leisure awareness in Osaka
16) Hung-Ching Lu: The study of leisure activities of traditional festivals of Han people in Taiwan
17) Hyunju Choi, Seonglye Yim: Homosexual discourses of men's football photographs in the internet general portal site
18) Chien wen Chen, Hsiao-chang Chao: How the Sports concepts develop and its effect on the Lesbian Society in Taiwan ? In the View of the Traveling Theory of Said
19) Toshiaki Sakai: The establishment a system to foster tennis players in Japanese universities
20) Chen Jui Chen: A study of the Relation between Service Quality, Customer Satisfaction and Repurchase Intention in Sanchong City of Taipei County's Swimming pools
21) Shih Yi Cheng, Chiin Ling Hsiao: The research of signifier and signified of Chinese Dance Body Symbol
22) Tetsuro Kita, Shigeru Horie and Shin Yoshihara: Current status of official web site of sport facilities in Japan: Comparison between golf courses and ski resorts
23) Masaki Nagamatsu: Making the registration system of sport leader for sport club in school: Osaka prefecture board of education report